

体内時計の中枢を調節する G 蛋白質共役型受容体シグナル機構



この度栄誉ある日本内分泌学会研究奨励賞を頂きました。私のこれまでの研究は、日本内分泌学会の多くの先生方のご指導によるものです。この場をお借りして御礼申し上げます。

ふりかえりますと、私は、この学会で、大先生に憧れ、教えられ、先輩同僚に感化されてまいりました。私は理学の出身ですが、日本内分泌学会は、私のような医学を知らぬものさえも温かく包み込み、さらにそれを積極的に育成してくださりました。

私は、生体リズムを基盤とした時間医薬科学の創成を目指して、これまで研究を進めてまいりました。体内時計は、ご存知のように、昨年度、ノーベル賞を受賞した分野で、分子メカニズムについては、かなり詳しいところまでわかってまいりました。またさらに、それが壊れると、高血圧や、不眠症、さまざまな代謝疾患が生じることから、その重要性がたいへんクローズアップされております。

このような中、私たちはいま、実験動物において見出した病態的帰結をヒトにトランスレーションする研究、そしてそれを実際、緩和するために、体内時計の中枢を狙った創薬研究を展開しております。今回の受賞内容では、体内時計の中枢を調節する GPCR シグナルについての基礎研究が評価されました(Doi et al., Nature Commun 2, 327, 2011; Doi et al., Nature Commun 7, 10583, 2016)。

日本内分泌学会には、YEC 中堅若手の会という、若手を中心とした学会公認の会があります。とても幸運なことに私はその初代世話役の 1 人です。平成 22 年に始まったこの会では幹事の橋本貢士先生（現東京医科歯科大学准教授）を筆頭に、大塚文男先生（現岡山大学医歯薬学総合研究科教授）、井上啓先生（現金沢大学新学術創成研究機構教授）、田中知明先生（現千葉大学医学部教授）、竹田秀先生（現せいせき内科院長）、栗原勲先

生（現慶應義塾大学医学部講師）、田中智洋先生（現名古屋市立大学医学研究科准教授）の世話人が一丸となって、若手の底上げと“噴き上げ”を目指した討論を活発に行いました。私は、この時、この諸先輩方から、日本内分泌学会の情熱と、懐の深さ、そして、科学に対する芯の強さを学びました。

Life is n=1. とはノーベル賞受賞学者の Michael Rosbash 博士の言葉です。
“There are of course no control experiments in life; everything is an N of 1 ...”

そもそも生命科学の転換期において「若手研究者のロールモデル」というのは真の意味では無いのかもしれませんが、Rosbash 博士の言葉を肝に銘じ、今後も精一杯努力したいと考えております。

略歴

平成 10 年 東京大学理学部生物化学科卒業
平成 12 年 東京大学大学院理学研究科修士課程修了
平成 14 年 仏国国立科学センター(東京大学大学院研究指導委託により留学)
平成 14 年 日本学術振興会 特別研究員 DC2
平成 15 年 東京大学大学院理学研究科博士課程修了、博士（理学）
平成 15 年 日本学術振興会 特別研究員 PD
平成 16 年 日本学術振興会 海外特別研究員（仏国国立科学センター）
平成 18 年 神戸大学大学院医学系研究科 助手
平成 19 年 京都大学大学院薬学研究科 講師
平成 21-24 年 日本学術振興会 日独先端科学シンポジウム事業委員会 企画幹事
平成 22-26 年 日本内分泌学会 若手・中堅の会 世話人
平成 23 年 京都大学大学院薬学研究科 准教授
平成 28 年 日本学術振興会 日米独先端科学シンポジウム事業委員会 企画幹事
平成 30 年 現職